



介護の現場から

人事交流で見えてきたこと ②

昨年度から、人事の活性化、部門間異動制度を視野に、居宅部門と施設部門の人事交流がはじまりました。今年度は相談支援領域と介護領域でそれぞれ交流を行っています。各部門で交流対象となった職員の方々に聴いてみた交流4か月の感想等、第2弾。

施設部門から居宅部門

池上琢爾さん / 高齢者福祉施設紫野 → 北事務所

■ 人事交流の打診を受けて、まず何を感じましたか

「部門間人事交流で、サービス提供責任者として居宅部門への異動をお願いしたい」と打診を受けました。予想外の話で、まずそれを聞いたときは、「部門間人事交流って何?」「居宅部門へ異動?」と思ったのが本音でした。話を聞けば聞くほど、「自分にできるのだろうか」「どんな仕事内容なのだろうか」と不安になってきたことを覚えています。しかし、時間が経つにつれ、こんな機会はなかなかないので頑張ってみようと思うようになりました。



在宅介護員と打ち合わせをする池上さん（左）

■ これまでの業務はどのようなものでしたか

高齢者福祉施設紫野 老人デイサービスセンターで、生活相談員兼ケアワーカーとして業務をしていました。新規利用の依頼の対応、担当者会議への参加、ご利用者からの相談対応、利用料請求が主な仕事でした。もちろん、現場でのご利用者へのケアもしていました。

■ これまでの業務で、大事にされていたことは何ですか

- デイサービスでは、次の3つをモットーにしていました。
- 1 ご利用者がデイサービスを利用されている間は一秒でも多く楽しんでいただく
 - 2 ご利用者が自主的に役割を持って過ごしていただける環境をつくる
 - 3 職員が働きやすい職場をつくる

■ 数か月が経過して、新たな気づき、発見等あれば教えてください

デイサービスでは直接ご利用者と関わるので、ご利用者の様子を自分の肌で感じられますが、訪問介護でのサービス提供責任者（在宅相談員）は、コロナ禍で、ご利用者宅に行く機会は、あまりありません。実際に訪問しているヘルパーからの情報が頼りです。そのためにもヘルパーとの関係をつくり、いかに多くの情報を聞き出すかが重要だと思います。

また、デイサービスも訪問介護も、在宅生活を支援しています。しかし、デイサービスはご自宅までお送りすれば、その後どのようにご自宅で生活されているのか分かりません。反対に、訪問介護は自宅での生活は分かっても、デイサービス利用中の様子等が分かりません。デイサービスと訪問介護の両方が連携することにより、本当の意味で、ご利用者を支えることができるのだと思います。

■ 今の思いをお聞かせください

通常の人事異動で経験できない貴重な役割をいただけたと思っています。全く未経験であることで、先入観なく仕事ができるメリットもあります。今の年齢になって、一から学ぶ機会もなくなってきています。限られた期間でできるだけ多くのことを吸収し、日々、成長していきたいと思っています。

■ 現在、どのような業務を行っているのでしょうか

昨年度末、総合福祉施設塔南の園への異動を打診された際は、かなり動揺しました。それと同時に、20年近く勤めてきた訪問介護の事務所を離れることに寂しさもあり、複雑な心境でもありました。

いざ異動してみると、デイサービスの生活相談員兼ケアワーカーとして勤務することとなり、毎日複数のご利用者と接し、入浴、排せつ等の介助や送迎、レクリエーション等、元職種ではほとんど経験してこなかったことを業務として経験させてもらっています。

■ 居宅部門と施設部門の違いはどんなところでしょうか

これまで、訪問介護の現場では、ご利用者一人ひとりにお会いすることはあっても、一度に複数人と接することがなかったため、ご利用者のお名前を覚えることだけでも大変でした。

また、ヘルパーとしての業務経験がほとんどなかった私にとっては、直接介護を行う機会も少なく、介護の基本を覚えることから始めなければなりません。とにかく、新人として修行を積む気持ちで、日々、他の職員の親切な指導や助言等を受けながら、業務にあたっています。

■ 数か月が経過して、新たな気づき、発見等あれば教えてください

当協会の優秀な人材の豊富さを再確認しました。デイサービスにおいても、同職種の全員が高いレベルで業務を実施されており、また、ご利用者の介護方法やデイサービスの運営等に関する提案、さらにレクリエーションや工作等のアイデア創出等、職種を越えて検討、実施されている場面も多々見受けられ、職員一人ひとりの自主性・主体性を感じています。

■ 今後の目標は

協会の中期経営計画の基本目標において、人事交流は、基本目標3「新しい組織と人で」に関係する項目の一つだと言えます。自分自身がまず考えるべきことは、地域レベルでの部門の垣根を越えた事業所間連携についてです。組織の収益性、地域の公益性、ご利用者の満足度の向上においても、活発な意見交換が重要だと感じます。また、自身が経験している人事交流を通して、今までは考えもしなかった新たな職種への異動が実現し、感じたこと、経験したことを活かし、微力ながら、職員がやりがいを持って、働き続けられる組織づくりの一翼を担うことができると考えています。



介護現場のこれから

社会福祉法人リガーレ暮らしの架け橋 杉原 優子統括施設長

私が大学卒業と同時に介護職として現場で働き始めて間もなく、社会福祉士及び介護福祉士法が制定・創設されました。当時、日本学術会議で介護職員の専門性と資格制度について「ケアワーカーには、生命の尊厳、高齢時における生活の意味についての深い認識と、ケアワーカーとしての責任感・倫理感をともなう専門性が要求される」などの提言がなされたことも創設の背景となっています。

資格制度ができた当時、多くの施設では食事、排泄、入浴などのタイムスケジュールが決まっており、まだまだ高齢者主体の暮らしの場とは言えない介護現場でしたが、全国の介護現場で、様々な実践が試行されケアの質の向上を目指してきました。加えて、介護保険制度の創設は、その後の介護現場に大きなパラダイムシフトを起こしました。

2006年からはじまった地域密着型サービスに代表されるように、認知症や障害があっても、誰もが住み慣れた地域で、本人の意向に沿った暮らしや人生の継続ができること、尊厳の保持、そのための介護の重要性が明らかになってきています。“介助”そのものが介護の目的ではなく、その介護を通して高齢者の暮らしや人生が豊かになることに介護の価値が置かれるようになりました。

そのような介護の実践場面では、医学やリハビリテーションの基礎知識をもってそれらの専門職と連携ができること、生活への視点はもちろん、地域、家族との関係性に着目し、その力を生かすことができる介護の専門性が求められています。最初に触れた、介護福祉士はまさに介護の専門職の中核的な存在であり、さらに地域で介護を通じたマネジメントや事業所内のチームのマネジメントができる認定介護福祉士の活躍の場も広がっています。介護専門職が力を発揮できることが、これからの介護現場をそして人の暮らしを豊かにしていくと考えています。



地域の力 / 健康長寿のまち

鶴山児童公園「公園体操グループ」

高齢者福祉施設小川に併設されている上京区地域介護予防推進センターは、地域の高齢者が要支援・要介護状態にならないよう、運動や栄養など各種介護予防教室の開催や、自主的なグループ活動の立ち上げ・育成支援などを行っています。

今回は、そのような自主グループのひとつ、鶴山児童公園の公園体操グループを紹介します。

鶴山児童公園の公園体操グループ

鶴山児童公園は、上京区の京極学区にある比較的広い公園です。地域の方々からの「ここで体操がしたい」という要望を受け、自主グループの立ち上げ支援を行いました。公園体操リーダーの養成研修の実施、地域包括支援センターと協働しての広報活動、公園使用許可のための各種手配等を経て、2018年11月から活動を開始。毎週水曜日の朝9時30分から、毎回40名ほどの方が集まって体操を楽しんでいます。

鶴山児童公園愛護協会への発展

公園体操がスタートする前の鶴山児童公園は、雑草が生い茂る状態でした。「せっかくここで体操をするのだから公園を気持ちよく集える場所にしよう」と、「鶴山児童公園愛護協会」を結成し、草ひきや掃除、遊具の点検などの活動を始めました。

メンバーのひとり、Aさんは、数年前に脳梗塞で倒れて歩行に不安があったときに、ご近所の方に誘われて公園体操に参加されるようになり、みるみる元気を取り戻されました。今では主力メンバーとして、毎日草ひきをされたり、他の公園体操の運営スタッフとして活躍されています。奥様からは「公園体操に出会わなければ、寝たきりの生活になっていたと思います。本当にありがたいです」というお言葉を頂戴しています。

また、作業所に通う障害のあるBさんも、いつからか朝早くから公園に来て草ひきに参加されるようになり、今では新規の参加者に荷物置き場を案内してくれています。

毎週草ひきを手伝ってくれていた大学生のCさんは、卒業式の際、振り袖姿を見せに来てくれました。

ひととおり整備が進むと、自然と親子連れや子どもたちが集まりだしました。いま、鶴山児童公園は、体操の場だけでなく、たくさんの方の交流の場としてにぎわっています。

介護予防には「運動」、「栄養」、「社会参加」の3要素が重要です。また、同じ運動でも、一人よりも、グループに参加して行うほうが、要介護状態になりにくいことが分かっています。特に人と触れ合い、会話をすることは、人を活き活きとさせます。上京区介護予防推進センターは、今後もこのような自主グループを応援していきます。



地域の力 / 子どもにやさしいまち

子どもたちの見守り人「福井のおっちゃん」

塔南の園児童館のある九条塔南学区で子どもたちの見守りをしてきている「福井のおっちゃん」にお話を伺いました。



福井さんのフルネームと年齢、自己紹介をお願いします

福井武（ふくいたけし）、81歳。生まれは左京区の新洞学区。結婚してから九条塔南学区の公園に引っ越してきて50年ぐらいになるかなあ。孫2人はもう大学生と高校生やから、小学生見るとひ孫みたいなものや。

子どもの頃はどんなことをして過ごしていましたか

お寺の境内とか暑い時は蹴上の（琵琶湖）疏水でよう遊んだわ。動物園あたりの水が冷たいねん。このあたり（九条塔南学区）はそういう冒険的な遊びができる場所がないからなあ。

子どもたちの見守りを始めたきっかけは

4年ぐらい前、同じ公園に学校に行くのが遅い男の子がおつてな。「朝ごはん食べたか」とか声かけながら学校まで連れて行ったりしたことがきっかけで、他の子も見られるようになったなあ。

学校の見守り隊には入らず、個人でされているのはなぜ

学校の見守り隊だと予定に縛られるし、「みんな」を見ないといけない。そうじゃなくて自由に動いて気になる子を見守りたい。役じゃなかったらその子が中高生になっても声をかけられる。ぼくは自分の意思で自由に動きたいねん。

子どもを見ていて感じることはありますか

子どもの帰り方を見てたら学校で怒られたんかなとか分かることがある。学校ではしっかり怒ってくれる先生がいたらいい。その代わり児童館に帰ってきたらみんな羽を伸ばしているから、怒られたことを消化して家に帰れるんやと思う。

最後に、福井さんの楽しみは何ですか

子どもを見ることやな。今の大人は子どもに甘すぎる。昔の子はなんで怒られたかを考えていた。でもぼくも怒るばかりじゃなくて、子どもを「その気にさせる」こともするで。悪いことしたら怒るし、いいことしたら褒める。これが今の楽しみ。

インタビューをしていたら、「おっちゃん、今度コーラ買ってな」と耳打ちしに来たのは、おっちゃんが見守りを始めるきっかけになった子どもの弟。どこか温かい子どもとおっちゃんの信頼関係が感じられました。

ホームヘルパーをデザインする Part 2 / 伏見事務所

アソシエ No.5 (2020年9月)号で、居宅部門の「ホームヘルパーをデザインする」の取組をご紹介しましたが、今回は、その続報、銅駝美術工芸高等学校との連携授業の3年目の活動の様子をご紹介します。

訪問介護という仕事を若い世代にアピールすることを目指して始まった、銅駝美術工芸高等学校との連携授業の取組も3年目になりました。デザイン科の高校生の感性を通すと、ヘルパーの仕事にも新鮮な観点が変わり、授業をする側にも大きな励みになっています。

昨年度は「在宅介護の認知度を上げ、介護保険の利用の仕方をわかりやすくデザインでアピールするにはどうしたらよいか」という大きなテーマに取り組みました。高校生に現場同行してもらい、議論を重ね、「安心できる場所で変わらない生活を」「支えてほしいんです。あなたに」のキャッチコピーが生まれました。短期間に多くのことを吸収し、深く掘り下げて作品で表現する高校生の力に、毎回驚かされます。生徒の皆さん



がデザインした2種類のポスターと「訪問介護利用のリーフレット」も今年完成し、配布することができました。

今年度は在宅相談員とケアマネジャーの求人テーマを絞り、2クラス計20名の生徒の皆さんに授業を行いました。その後緊急事態宣言が発令され、ご利用者宅への同行実習はもちろん、学校でのグループワークやグループ作成も中止になるなど、コロナ禍で課題は山積みでした。心がけたのは、「コロナだからできない」でなく、「コロナでもできる。ピンチをチャンスに変えよう。ICTを用いて新しい取組をしよう!」でした。現場同行は、オンラインでのプレゼンテーションに替えました。画面を通して一人ずつ提案してもらうことで、逆に各々の思いをしっかりと感じとることができました。6月23日と24日



に行われた最終プレゼンテーションには本部、人材開発部の他5事務所が参加。「生徒は非常にたくさんの方が関心を寄せてくださっていることに驚きと嬉しさがあったようで、やりがいを感じたと思います」と先生も仰っていました。

各々が考えた作品は、新たな視点、若い感性で作成されており、どれも手に取ってみたいと感じる、はっと目を引く斬新な作品でした。生徒の皆さんからは、「介護のことを知らなかったが、調べたり話を聞いたりするうちに、この仕事を通して得られる人生経験、この仕事ならではの良さを作品を作りながら知ることができた」「介護職はきつい大変とイメージされがちだが、作品を通じてどう変えられるか考えた。人を動かすものを作りたい」と感想をいただきました。

作品は、10月に京セラ美術館で行われる「美工作品展」に展示され、また、作品の中からいくつかを実際に使用させていただく予定です。福祉、介護は、若い世代もいつかどこかで必ず関わるテーマです。デザインと福祉という一見つながりのないものがしっかりと関わり合い、新しいものを作り出していくことは、互いに大きな収穫になりました。リーフレットを持って「ヘルパーになりたいんです」と事務所に来られた方、事務所前で足をとめてポスターを見ている方も増えています。若いエネルギーに刺激を受け、福祉の魅力を発信し、少しずつでも福祉に、介護に、そして協会に関心をもって関わってもらえる人の輪が広がっていくことを願ってこの取組を続けていきたいと思っています。



高野事務所：山本紫里副所長より

「若い人に関心を持ってもらえるチラシを作りたいです。銅駝美術工芸高等学校とパイプがあります。やらせて下さい!!」という職員の一言から始まり早くも3年目を迎えました。今年は高野事務所も参加することになり、嬉しさと不安を抱えながらのスタートでした。毎年新しい生徒の皆さんの秘めたパワーに驚き、先生方の熱い思いに触れて、考えさせられることばかりです。5年・10年先、連携授業がどこまで大きな輪となり繋がりが続いていけるのか！想像するだけでワクワクしています。

伏見事務所：小林絢菜相談員より

連携授業も3年目を迎えることができました。完成した作品にはどれも17、18歳の少年少女が協会についてたくさん考え、調べ、想いを込めてくれたのだと感じられ、毎回胸が熱くなります。高校生たちの気付きに改めて自分が専門職であるということを再確認し、私自身もなぜ人材不足が起こるのか、福祉業界、協会の魅力とは何かを考える機会となっています。次年度はどのように感じ、どのような作品ができあがって来るのか今から楽しみです。

